



ヴァーミリオン・サンズ
/ *Vermilion Sands*
(1971) / J・G・バラード
(浅倉久志・他訳) / 早川
書房 (6/30刊・¥1,100)

砂鱗^{すなうろこ}が群れをなして飛び、砂の海がどこまでもつづく——^{ヴァーミリオン・サンズ}辰 砂は、どこにもない架空のリゾートである。しかし、そこに住む奇妙な人々と共に、領域は、確かに生きて存在している。

空を舞うグライダー、歌う植物、ハーモニーを奏でる彫刻、詩を創る機械、流動する肖像画、住人の情念を形に変える家、活性織物——これらは、大半が無生物であるのに、すべて“生きて”いるのだ。

ヴァーミリオン・サンズという、一連の短編は、あるパターンによって、物語が構成されている。これは、作者の処女作である「プリマ・ベラドンナ」以来、ほとんど変わっていない（九年後に書かれた、「コーラルDの雲の彫刻師」との共通点を見ても、よくわかる）。だが、このパターン化した人間たちは、むしろ物語の背景である。バラード流のユートピアが、ここに描き出される。テクノロジー社会の行きつく果て、それが、ヴァーミリオン・サンズの乾き切った浜辺なのだ。

半年を経て、早くも傑作続出の今年の翻訳陣だが、特に残しておきたい、優れた作品集である。（俊）